我流神話大全

椎名　馨

Ⅳ　信仰迷宮

「氷河期だ……」
吉野の弱々しい呟きは、蝉の大合唱に吸収されて消えた。ただいまの大学構内の気温は三十七度。陽を避けるため、木陰のベンチに座っているのだがそれでも暑いものは暑い。舗装された地面からは陽炎が立ち上っている。今卵を割り落としたら、瞬間でおいしい目玉焼きが完成するであろう。
「どうした。遂に脳が溶け始めたか？」
私は滝のように流れる汗をバスタオルでぬぐった。せっかく登校してきたのだから、冷房の効いた付属図書館や食堂に避難すればいいのだが、その体力が惜しい。
「違うよ、気温のことではなくて……」
言いかけた言葉も途中で小さくなる。普段の騒がしくてパワーみなぎる吉野からは想像できないほどの衰弱ぶりだ。珍しさを通り越して心配になってくる。私はバスタオルを、うつむいている奴の頭にかぶせて立ち上がった。
「冷たいもん買ってきてやる。何がいい？」
「……がない」
「は？」
思わず聞き返すと奴はタオルをひっつかみ、勢いよく顔をあげた。
「面白いことがなんっっっっにも無い！夏休みだというのに、ありえないことだ！面白さの氷河期だ！どうしてくれようか！」
私は一気に気が抜けるのを感じた。そういえばそういう奴だった。堰を切ったように怒鳴り続ける吉野から熱が放出されて温度計の目盛りが上がるのを確認し、私はそっと距離をあけた。
吉野は私の友人である。体の成分の七十％が好奇心でできており
「面白ければええじゃないか」を合言葉にあらゆることに首を突っ込んでは厄介事を引き起こす。そしてなぜか毎回私が巻き込まれてしまう！全く迷惑極まりないことだ。
ひとしきり話し続けたら少し元気になったのか、吉野は姿勢を正した。私は奴の肩を軽くたたく。
「まあ、面白いことはそんな都合よく起こるものじゃないからな。気長に待とうぜ……というわけで食堂へ行こう」
「そうだな、暑いし」
吉野が立ち上がりのびをしている間、私はなんとなしにあたりを見回した。
「っ！」
それを見た瞬間、私は電光石火の速さで吉野の体の向きを変えた。あれは吉野に見せてはいけないものだ。せっかくの平穏な夏休みが台無しになってしまう、ような気がする。
「なんだよ、痛いな」
文句を言う吉野を無理やり食堂の方へ引っ張っていく。
「え、なんかあったの？何？教えろよ！」
「なんにもない！」
振り向かないように全力を尽くすが、その前に背後に人の気配を感じた。
「逃げるの、ひどくない？」
笑交じりの声に背筋が凍る。もはやこれまでかと抑えつけていた手を緩めると、振り向いた吉野は途端に目を輝かせた。くそ、誰かは知らないが、この恨みはらさでおくべきか！
「志紀先輩じゃないですか！」
「え？」
思いがけない吉野の言葉に私は振り向いた。そこには、やはり何度見ても凄い外見の女性が仁王立ちしていた。
真っ赤な長い髪を一つのおさげにし、黒と白の天狗か山伏のような衣装を着ている女性。こんな変な人見たことがない。吉野に見せたら確実に燃え上がると考えたのだが、まさか知り合いだったとは。
「そうだ！志紀先輩は俺の尊敬する先輩なんだよ。出会った時から変わらないなあ、その恰好。素敵です！」
吉野は先輩のおごりのメロンソーダをストローでかき混ぜながら喋りまくる。
「尊敬するって言う割に、私は会ったことないぞ」
私はソフトクリームのコーンを齧る。すると、先輩はミルフィーユカツ丼で口をいっぱいにしながら話し始めた。
「私、この一年間かけて世界一周修行の旅に出てたのよ。ほら、私の夢

って天狗だし。えぇっと、吉野君に会ったのは彼が一回生の時。歩いてたら突然やって来て弟子にして下さいって、ねえ？」
なるほど、吉野ならやりそうなことだ。その前に、夢が天狗ってどういうことなのだろうか。突っ込んでいいのか少し迷う。
「凄いですね先輩！霊力ついてそうですよ。旅の途中で何か面白いことありましたか？」
すると先輩は何かを思い出したかのように手を合わせた。
「あったあった。そのことで帰ってきたのよ」
空の丼を置き、彼女はニヤッと笑った。
「旅をしてて、その土地の神社、祠は必ず見に行ったんだけど、たくさん見ていると同じような神様を祀ってるところが出てくるのよね。まあ、自然に神を見出しているわけだから頷けるんだけど。で、ここからが本題」
私と吉野はごくりと唾を飲み込む。
「とある神を祀っている神社がある町や村が、なぜか軒並み荒れてたのよ。数年不作が続いていたり、災害が起きていたり。どう考えても神様が怒っている、何とかしてくれって所々で頼まれたからルーツを調べたところ……このM市にある天児屋根命（アマノコヤネノミコト）神社が出てきたの。ちょうど出身地だし、修行した私なら鎮められるかなって思ってわざわざ帰ってきたわけよ」
天児屋根命とは、古事記や日本書紀で祭祀をつかさどる神として登場する神だ。天照大神が天の岩戸にこもってしまった時や、その事件で須佐之男命が追放される際に祝詞を奏上したとされる。ちなみに別名は春日大明神。総本山は奈良の春日大社である。私の町の神社ではない。
「系図が途中でいろいろ枝分かれしてるからね。私も春日大社につながると思ったんだけど不思議なもんだ」
やれやれ、と志紀先輩は肩をすくめた。
「それで、鎮めるって……どうするんですか？」
いくらなんでも一年間修行したところで神を沈められるほどの霊力がつくとは思えな……というか人間が霊力をもつことなんて本当にあるのだろうか。しかし彼女は完全にやる気だ。その自信はやはり修行から来るのだろうか。話を聞くところでは、山伏装束で普通に旅行したとしか伝わってこない。
「やっぱり凄い、尊敬します。あ！俺達に、先輩のお手伝いさせて下さい！最近面白いことがなくてつまらなくて」
吉野が先輩の手を掴んで真剣な表情で言った。「俺達」ってことは私も入っているのだろう、当然。
「いやいやいや、私はいいですよ。（だいたい先輩に霊力があるなんて思えないし）日本の神って手を出したらいけない雰囲気を放ってますし。危険な香りがします」
すると吉野と先輩は同時に「あり得ない」というような表情を浮かべた。
「残念だよ。さっき俺に『気長に待とうぜ』って励ましてくれたよな。でも本当はお前が一番面白いことが起こるのを待っていたんだろ？俺には分かる、遠慮なんてすんなよ」
「吉野君の友達だから面白いことには目がないのかと思っていたけど、残念だわ、残念よ。危険だと思っているなら、なおさら手伝いしようと思わないの？」
的外れの励ましと理不尽な怒りに、私は思わず頭を抱えた。ああ、吉野が二人いる……。
　大学から国道を一つ越え、ひたすら山のほうに歩いて行くとそれはあった。パワースポットとしてそこそこ有名らしく、若者がたくさん徘徊している。木がたくさん植わっていて、影が多いので助かる。
「おい、吉野。鳥居の真ん中通るなよ」
「あ、そうだっけ？」
吉野は反復横とびのような動きをして端によった。こいつは今まで様々な神にかかわってきたにもかかわらず、こんな初歩的なことも知らなかったりする。
「鳥居は神様の通り道」
志紀先輩が歌うように言いながら端を通った。そして本殿を指差して言う。
「注連縄は、太い方が右、細い方が左。人が神域に入れないように」
「物知りですね、修行してると、そういうことも学ぶんですか？」
「まあね」
吉野は尊敬のまなざしを向ける。ちなみに私は知っていた。そのまま本殿へ向かう途中で吉野が小銭入れを取り出した。
「お前、賽銭あげる奴だったのか。なんとなく面倒がってやらないと思ってた」
「失礼な」

吉野は一円玉を取り出すと、指で弾いた。それは回りながら飛んでいくが、賽銭箱に届かず落ちる。
「おしい！」
落ちた一円玉を拾って同じ位置に戻ると、再度チャレンジした。しかし何度やっても、軽い一円玉は箱まで飛んでいかない。
「おいおい、罰あたりだぞ！素直に入れろよ。あと、一円じゃなくて五円とか四十五円とか……」
私が慌てて吉野の腕をつかむと、先輩が落ちた一円を拾う。
「そうそう、重さを出した方がいいよ」
先輩はそのままそれを自分の財布に入れると、五十円玉を取り出して弾いた。それは美しい弧を描いて、賽銭箱に吸い込まれていった。私は呆れてものも言えない。志紀先輩は、一体何なのだ！
「お、面白そうなことしてる！」
近くにいた青年数人が先輩と吉野を見てよってくる。あっという間に彼らは意気投合すると、賽銭投げレースを始めた。私は他人のふりをして別のところへ行く。
「これじゃパワースポットでもパワーもらえねえよ」
小さく悪態をつく。気付くと小さい注連縄に四角く囲まれた大きい石の前に来ていた。
「『龍ヶ井』？井戸か」
近くにあった立札を読む。
「『今は水がほとんどありませんが、昔は水が深々とあり、神霊が宿ってそこから龍が現れ天に昇ったという伝説があります』。へえ……」
私はしばらくしてもまだ遊んでいる二人を引っ張って神社を後にした。
　大学に戻ると、志紀先輩はおよそ修験者とは思えないようなことを言い放った。
「夜になったら、本殿の中に忍び込もう」
本殿は、基本的に神を祀っている神殿と礼拝をおこなう拝殿で成り立っている。神殿にはご神体があり、先輩は神と接触するために神殿に入ろう、と言っているのだ。
「そんなっ、神域ですよ？不法侵入ですよ？」
反対するのは私のみで、あっという間に多数決が行われ、民主主義の名のもとに不法侵入が決定された。
「いやあ、俺本殿に入るの初めてなんですよね。楽しみです」
「入ることがないのが普通だぞ阿保が！先輩も修験者なら分かるでしょう！」
先輩は全く悪びれた様子なくキザに前髪を払った。
「だって、私しかいないじゃない？結果的に神が鎮まればいいんだってば」
「しかし、あの神社の周りが荒れているということはないじゃないですか。先輩の勘違いで、あそこが全く関係なかったら本当にただの不法侵入ですから！それに神罰が下るかもしれないし。日本の神は問答無用でそういうことしてきそうじゃないですか！」
自分で話していてだんだん恐怖を覚えてきた。神ではなく、この先輩に対してである。神を恐れないものが最後に罰を食らうというのは、割と定石のような気がする。
「落ち着きなって。大丈夫、私と、君たちがいれば」
しかし先輩の根拠のない自信の前に、私は黙らざるを得なくなってしまった。
　夜中の神社は墓と同じくらい「何か」が出そうで不気味だ。何とは言わないが。音をたてないように本殿まで歩いて行くと、先輩が扉の前に立った。
「閉まってるだろ、どうせ」
という私の、もはや望みに近い呟きは、小さく木のきしむ音で無残にも打ち砕かれた。神主を呼び出して防犯対策について数時間ほど説教したいものである。怒りに燃えている間に、二人は物を倒さないようにゆっくりと奥に近づいていき、もうひとつの、小さな扉を発見した。
「これか……でもさすがに神殿までは開きませんよ。たしか特別な時以外は開けられないようになってますから」
なんせご神体があるのだ。そう簡単に皆に見られてたまるか。
「あ……ホントだ。あれ？開くと思ったんだけどなあ」
先輩が扉をあちこち触り、何とか開かないかと探っている。私は一番初めに外に出られるよう、本殿の入口に立った。
カチャ
「あ、開いた。よかったー」
先輩はどうやらとんでもなく強い運の持ち主らしい。しかしその運は自分に都合のいい時だけ発動し、周りの心配や迷惑は全く考慮されない。
　私は仕方がなく扉の開いた神殿の前へ移動した。中をそっと覗くと、

そこにはただ一枚の丸い鏡が置いてあるだけであった。それがご神体らしい。
「え、これだけ？」
吉野が不満そうに口をとがらせる。対して先輩は嬉しそうだ。
「三種の神器の一つも鏡だからね。神様って感じするよ」
そう言って彼女はそっと鏡に手を伸ばす。
「ご神体に触るのはちょっと……」
きっと届かないであろう注意をぼそっと呟く。
「わっ！」
先輩が手を引いた。その横顔が、初めて恐怖を浮かべているのを私は見逃さなかった。
「何があったんです？」
そう聞いた瞬間、鏡が青白く光を放ちだす。
「やばいんじゃないか？これ」
頬を流れる汗は暑さのせいではないらしい。光はどんどん強くなり、私達は顔を腕で覆いながら後ずさった。こういう時、先輩の装束だと袖が広くて顔全体を隠せて便利だなと、呑気にも思ってしまった。
少し弱くなったのを見計らってゆっくり腕をのけると、
「……あ、ぁ……」
まず目に入ったのは大きな注連縄、そして
「なんでだよ……」
神殿の中の鏡は消え、床一面に薄く光る水が張ってあった。不気味なほど澄んだ水は波一つ立たない。
「ど、どうします？」
固まってしまっている先輩の服を吉野が軽く引く。先輩はビクッと体を震わせると、いつもの自信たっぷりな笑みを浮かべた。
「ごめん、ちょっとびっくりしてね……。これ、水の中に入ったら何か起こるかな？」
「俺もそう思います！神の世界への入り口ですよ、これ！」
吉野はこんな状況でも無邪気である。それより、水と言えば私には別の言葉が思い浮かぶ。
「黄泉への入口」
　誰が先に中に入るかで少し時間をつぶしたあと、三人並んで同時に入ることになった。左から、吉野、先輩、私の順だ。こうして並ぶと、三人ともそれほど身長が変わらない。しめ縄の前に立ち、小さく深呼吸する。
「「「せーの」」」
一斉に足を踏み入れる。水は本当に浅く、靴の中に染み込んでこないほどだ。
「いてっ」
吉野が間抜けな声を上げる。頭を押さえて、少し遅れて水の中に入ってきた。
「どうしたんだよ」
「いや、注連縄が頭に当たってさ」
「ふうん」
先輩は神殿内から外を見つめている。光がまた強くなり、視界が真っ白に染まった。
　光が消えると、そこは広い畳の部屋だった。四方を障子に囲まれている。
「なんだかありきたりな風景だな。開けても開けても畳の部屋が続いてるってやつだろ？」
吉野が首をかしげ、一つの障子戸を開けた。その言葉通り、向こうにも畳の部屋がある。
「とりあえず、進んでみよう」
先輩が言う。私達は真っすぐ進み、障子戸を開けてまた進んでいった。後ろを振り返ると、初めの部屋がずっと遠くに見える。同じ風景が続くので、鏡を見ていると錯覚する。
　さて、どれだけ進んでも景色が変わることはなく、私達は正直疲れを感じていた。志紀先輩など、口数がめっきり減り、黙々と歩いている様子は少し怖かった。
「そろそろ休憩しませんか？」
そう吉野が言わなければ、私達は倒れるまで歩き続けていただろう。畳に座りこんでしばし休息を取る。
「先輩、この状況から抜け出す方法、何か分かりませんか？」
うつむいて動かない先輩に話しかけると、彼女は視線をこちらに向けた。その眼に、私は思わず息をのんだ。
――怖い――
何が変わったというわけではないが、そこはかとない暗さを感じた。

しかしそれは次の瞬間元に戻った。
「え？ああ、どうだろうね。永遠に続いているのかも……。一回、横に進んでみよう」
「そういえば、ずーっと真っすぐでしたもんね！」
楽しそうにしている吉野が救いである。休憩を終え、吉野が横の障子を開く。やはりそこにも同じような畳の部屋が続いていた。私は無意識のうちに、先輩の後ろを歩くようにしていた。そうすると一番後ろになるが、彼女を背後にするのは少し抵抗があったのだ。
「しっかし、本当に何にもないなあ」
今度は真っすぐ、横の順番で進んでいくがやはり何も変わらない。
「あっ」
また障子戸を開けると、その部屋は横の戸が開いていた。やっと訪れた変化に少し気持ちが高くなる。
「これ……」
開いている戸の奥を見て、私は泣き出しそうな気持になった。戸はずっと奥まで続いている。そう、私達は横に行ったり縦に行ったりしているうちに、いちばん最初の部屋に戻ってきてしまったのだ。
「なんだよ、どういうことだよ……」
声が震える。吉野の制止する声も耳に届かず、私はまだ開けていない戸を開け、中に入った。それでも景色は同じ。何度開けても、何度部屋を超えても。
　気がつくと私は座り込んでガタガタと震えていた。既に吉野や先輩とははぐれてしまったようだ。私は深い後悔の念に駆られた。こういう時に一人になることほど危険なことはない。それに、様子のおかしい先輩と吉野を二人にしてしまったことも心配だ。
「落ち着け！」
私は自分に言い聞かせると、ゆっくり立ち上がった。元来た道を戻れば――覚えてなどいないのだが――会える。私は乱暴に開けられた障子戸を見て苦笑すると、自分が通ったであろう道を逆に戻ることにした。
　一旦は落ち着いたものの、やはり恐怖はなかなか離れない。その証拠に後ろを振り向けないし、何か映っているのではないかと思って閉まった障子戸の方を見ることもできない。そんな感じなので、何部屋か奥を、山伏（天狗？）装束の人が横切っていくのを見た時、思わず小さい悲鳴をあげてしまった。
「っせ、せんぱ」
呼び止めようとしてふと気付く。
――吉野は？――
少し待ったが吉野が後を追っていくのを見ることはなく、あの安心する無邪気な声が聞こえることも無かった。はぐれてしまったのか？もしくは……私は小さく深呼吸をし、音をたてないように先輩の後をそっと追った。
　先輩は既に私達が通ったところを延々歩いていた。ゆらゆらと揺れながら、何かに操られるかのようにぐるぐると歩いている。
ある瞬間、先輩を見失ってしまった。焦って小走りに追いかけると、突然首根っこをつかまれる。しまった、油断したか！
「う、あああああああああっ？」
「びっくりした……どうしたの」
そこにいたのは、何と懐かしいその顔、吉野であった！
「はあぁぁぁ～～、良かった……」
私は安心感で思わず大きくため息をついた。
「そういえば、先輩知らない？気がついたら消えてたんだけど」
首を傾げる吉野に先ほどからのことを話した。
「なるほど。先輩は霊力があるから、神の力に影響されちゃってるのかな。ほら、天児屋根命だっけ？」
「本当に霊力があるのか分らんけどな」
どちらかというと、勝手に本殿に入り、しかもご神体のある神殿の扉を開けたことで神の怒りをかってしまい、罰として…魂を取られたとか、そう考えるのが自然だろう。
「そっかなー」
どこまでも気楽な言葉に、私は思わず噴き出した。
「ふう。さて、少し楽になったよ、吉野。先輩を探して、神様を鎮めよう」
「そうだな！」
私達はまだ開けていない障子戸を開けて先へ進んだ。
　歩きながら、吉野が不意に口を開いた。
「そういえば、先輩がおかしくなったのって、神殿の扉を開けた時からだよな」
「ああ、そういえば」

鏡を見た時、それまでの余裕しゃくしゃくな表情が恐怖で固まった瞬間を、私はしっかり覚えていた。
「それから、水の中に入ったときに外をずっと見てただろ？」
「そうだっけか」
「そうだよ。何見てんのかなって思ったからな。で、あの時だけど先輩、注連縄を見てたんじゃないかな」
思い出してみると、私達三人は注連縄をくぐって水の中に入った。
「ああ、お前が頭ぶつけたやつな」
茶化すように言うが、吉野は真剣な顔を崩さず言った。
「それが問題。俺とお前は同じくらいの身長だろ？何で俺だけ頭ぶつけた？」
確か、先輩が昼間言っていた。
「太い方と細い方あるんだろ？太い方が右、細い方が……」
あの時、吉野はどっち側だった？頭をぶつけたなら太い方にいた。しかしあの時は
「俺、左側にいたよな。あの注連縄、逆になってたんじゃないの？」
言われてみるとハッとした。「逆注連縄」、注連縄があの向きになっているのは、人間が神域に入れないように。それが逆になっているということは
「神が神域から出られないように。……ここをルーツとする世界中の神社や何かがある町が荒れていると、言っていたよな。神が怒っていると。こうは考えられないか？」
吉野はそこで言葉を切った。
「ここには天児屋根命ではない異形の神が棲んでいて、それが外に逃げ出さないように真の注連縄は逆になっている、しかしそれが逃げ出そうとするせいでルーツのある所が影響をうけている、とかさ」
部屋の空気が一気に下がるのを感じた。だからルーツが春日大社からずれるのか？もし吉野のいうことが本当ならば、私達はとんでもない所に足を踏み入れてしまったのではないだろうか。
「いや、考えすぎだろ。普通に神がこの神社を捨てていかないように逆にしてあるのかもしれないし、他にも理由は作れそうだし」
考えていたら良く分らなくなってきた。しかし吉野の説は割と怖い。その時、かすかに人の声が聞こえた。
「なんだ？お経みたいだなこれ」
「神道だからお経じゃないだろ」
囁き合いながらも声を聞いていると、だんだん大きくなってくる。私達は声のする方へ歩いて行った。男が唱えているのだろう、なかなかの美声だ。
「うあ、障子が」
とある障子を開けたとき、他の三方の障子が無残にも破かれていた。初めて変化がみられた部屋である。
「しかし凄いな。畳もなんだか水が染み込んだような跡がある」
部屋の半分が水にぬれて、ささくれている。破れた障子の向こうに見える部屋は、どうやらここよりひどいようだった。
私は向こう側の障子を開けた。その部屋は畳に水が染み込みきらずに小さな水たまりができている。男の唱えている声がだんだん激しくなる。
「この声、もしかして天児屋根命？確か祭祀の神で、祝詞を奏上したエピソードを先輩が言ってたよな」
そういえば志紀先輩はいつ見つかるのだろうか。何となくではあるが神に近付いているような気がするのに、先輩がいないと神を鎮めるところまで出来ない。先輩に霊力があればだが。
　気がつくと声は消えていた。私達はまた破れた障子を開けた。
「あ、久しぶりに普通の部屋だ」
何となく安心する。しかし、それもつかの間のこと。遠くの方でずるずると、何かを引きずるような音が聞こえた。と同時にバリバリと紙が破れるような音。
バリガシャーンッ
自分たちがいる部屋の一方の障子を勢いよく突き破り、現れたのは巨大な龍だった。
「うわっ！」
あまりの勢いに、私達は吹っ飛ばされ、前いたところに着地した。いきなり現れた龍はあたりに水を撒き散らし、そのまま反対側の障子を破り消えていく。
「いってえ、なんなんだ……」
吉野は頭を押さえて起き上がり、龍が消えていった方向を興味深そうに見ている。私は龍がやってきた方向を覗き、向こうから見覚えのあるシルエットが歩いてくるのを発見した。水にたっぷり浸かったのかびしょぬれの衣装を重そうに絞りながらやってくるその人は、

「志紀先輩！」
間違いなく、私達の前から突然姿を消した志紀先輩であった。吉野は私の声で振り返ると、先輩の元へ走って行った。
「大丈夫ですか？探してたんですよ」
「大丈夫……。それより、やっと天児屋根命の居場所を見つけたよ！」
嬉しそうに報告する先輩は、先程の暗い影を落とした姿とは全くかけ離れていた。
「最初、鏡を見た時に見えちゃったのよね、こっちを見つめてる目が」
衣装を手で絞りながら先輩は言う。
「神の目って、やっぱり何か影響するのよ。それで私ちょっとおかしくなったみたいで。で、気がついたら皆とはぐれてるし。ウロウロしてたら池が中にある部屋にたどり着いて……障子の向こうに烏帽子をかぶったシルエットが見えたから、これはもう天児屋根命だと思っていこうとしたんだけど、急に池から龍が出てきたし！」
恐らくその龍とは、私が昼間見た「龍ヶ井」の伝説に登場する天に昇った龍なのだろう。神が使役しているのだろうか。
「一瞬でびしょぬれになってさあ、まあそれで意識もはっきりしたから良いんだけど。龍が進む方向に何かあると思ってついていったら、君たちがいたんだよね～～」
ウロウロしていて神に近づいたり、龍を追って私達と再会したりと、先輩はやはり相当運がいい。一瞬、それが霊力なのかと考えてしまったほどだ。
「とにかく、会えて良かったです。さあ、神のところへ向かいましょう」
にわかにテンションが高くなった吉野がスキップをしながら龍が現れた方向へ進んだ。先輩の様子がおかしかったのは本当に何かあったのか。しかし私と吉野に悪いことが起きなくて本当に良かった。私は先輩と顔を見合せ、苦笑してから吉野の後を追った。
　池のある部屋まで行き、先輩が思い切って障子戸を開ける。
シュッ！
畳に紙が飛んできて突き刺さる。
「何者だ」
私と吉野が聞いた、何かを唱えていた美声が、今度は怒ったような声で私達に話しかけている。そういえば神が怒っているという話だった。
「修行中ですが、天狗を目指す志紀という者です！あと二人の弟子でございます」
いつの間にか私まで弟子になっていることにすぐさま否定したいが、空気を読んで黙っておく。
「……入れ」
私達はそろそろと部屋に入る。
中には狩衣のような服を着た、やせ形の男が座っていた。長髪は紫がかった黒色で、ゆらゆらと空中を揺らめいている、目は刃物のように鋭く、口角はすっかり下がり、怒りを我慢しているようだ。
「本日は、天児屋根命のお怒りを鎮めに参りました。何ゆえ、お怒りになっていらっしゃるのでしょうか」
丁寧な言葉遣いで話す先輩の声は若干震えている。やはり神を目の前にして緊張しているらしい。
「最近、どこの社でもそうだが、雑に扱われているような気がするのだ」
「はい」
「人間たちが大掛かりな戦をしている頃から、神々は蔑にされてきた。それが許せん。神は人間の都合で助けを与える存在ではないのだ。助けや御利益が欲しくば、それ相応の態度が必要となる、わかるな？」
私は昼間神社で賽銭投げレースをしていた若者たちを思い出していた。パワースポットにパワーをもらいにきた彼らは、パワーの対価を払おうとせずに神に対して罰当たりな態度をとっていた。そういうことか？まあ、パワースポットの場合は本人が「感じた気になっている」ことが重要なんだろうが。
「私はそれに怒りを感じている。神に敬意を払え、そういうことだ。私に力があることが万人に知られることは構わない。そういった力による利益を簡単に得ようとするやつらを見ると罰をくらわしたくなる！だいたい人が多すぎる。童が羽つきをしている程度がちょうどいいのだ」
身に覚えがあるのか、吉野と先輩が小さくなった。
「分かりました。これから参拝客の礼儀を徹底させましょう」
先輩が神妙に答えた。
「……お前の言葉、どこまで真実となるか試してもよい。もし改善されることが無くば、神罰もやむを得ん、分かったな」
すっかり圧倒された修験者はガクガクと頷くと、少し間を開けて口を開いた。
「あの、龍は何だったのでしょうか」

神は「ああ」と片手を額に当てると、小さく頭を下げた。
「怒りの力で、龍ヶ井の龍が呼び戻されてしまったようでな。使役しようとしたのだが、元々そのような生き物ではないため暴走してしまったのだ。そこは詫びよう」
天児屋根命は鋭い眼を閉じると、手をかざした。そのとたん、私達は青白い光に包まれた。
　気づくと、私達は本殿の前に転がっていた。空は薄紫色――朝だ。
「んん……先輩起きて下さい。吉野！ほら起きろ」
二人はむにゃむにゃ言いながら起き上る。合わせたわけではないが、全員一緒に本殿の方を見た。朝靄の中の本殿は、神の住む場所にふさわしく荘厳さを見せていた。
「さて、見つかる前に帰ろう」
先輩の言葉に私達は無言で頷くと、天児屋根命神社を後にした。
　さて、それから――。
　志紀先輩はまたすぐに海外へ旅立った。問題が起こっていた町を確かめに行くためらしい。
「そのついでに、さらなる修行をして参る！」
真剣な表情だが、修行を「ついで」だと考えるところが彼女らしい。私は吉野と残りの夏を涼やかなところで過ごした。
「そういえば、あの逆注連縄の意味は結局どうなんだろう」
吉野が図書館の椅子にもたれながらぽつりと呟いた。私は読んでいる文庫本を置くと少し考えた。
「天児屋根命は本物だった……それは、神は祀られている神社全てを行き来できるはずだからっていう、根拠の無い予想からだけど。じゃあ、あの逆注連縄は、使役しようとした結果暴走してしまった龍のため？」
「案外、気を使ってくれるんだな……ま、なんでもいいや」
吉野は考えるのが面倒になったのか伸びをして、そのまま椅子に深くもたれかかった。しばらくして規則的な寝息が聞こえてくる。私はポケットから葉書を取り出す。聞いたことのない地名からの暑中見舞いだ。
「修行から戻ってきたら巫女のバイトでもするよ。参拝客の見張りのためにね。それまではあんたたちが何とかしといて♪」
まあ、神と約束したのは先輩なのだから、罰を避けるためには最善の策だろう。最後の文章も、あの場にいた私たちが連帯責任を取らなくてはいけないため、無視することはできない。吉野は喜んでやりそうだなあ。

夏もそろそろ終わりである――。